

3 掲載種の解説

①

1001

②

ヒカゲノカズラ科

③

〔和名〕

スギラン

④

〔学名〕

Phlegmariurus cryptomerinus (Maxim.) Satou

⑤

埼玉カテゴリー

2024 EN
2005 CR

2011 EN
1998 CR

⑥

全国カテゴリー

2020 VU

⑦

【評価所見】

山地および亜高山で7地点50個体未満の報告があるが、樹上の高い所に生育するため、発見が難しく個体数は少ない。生育には大径木が必要なことから、森林伐採や自然攪乱、自然遷移が危険要因となる。

⑧

【県内生育状況】

沢・谷に近い落葉広葉樹の大木か、中腹の岩に着生している。

⑨

【特記事項】

標本:SMNH-Pt6035 (2016)、TNS1145512 (1989) など。特別地域指定植物[秩父多摩甲斐国立公園]

⑩

【県内分布状況】

亜高山	山地	低山西	低山東	丘陵北	丘陵南	荒川 西台地	大宮 台地	加須・ 中川低地
○	○	○						

⑪



① 【種番号】

分類群ごとに種番号を付した。1000 番台は維管束植物、2000 番台は蘚苔類、3000 番台は藻類、4000 番台は地衣類、5000 番台は菌類である。

② 【科名】

それぞれの科名について記載した。

③ 【和名】

標準的なものを採用した。和名の付けられていないものについては学名などで示した。なお、同種異名の場合は別名を（ ）で示した。

④ 【学名】

学名は米倉浩司・梶田忠 (2003-) 「BG Plants 和名—学名インデックス」(YList), <http://ylist.info> (2024 年 3 月 10 日) によるものとし、「Green List ver. 1.01」(Ebihara et al. 2016; Ito et al. 2016) により補完する。シダ植物は「日本産シダ植物標準図鑑 I・II」(海老原 2016a, b) による。

⑤ 【埼玉カテゴリー】

本書の評価 (2024) に加え過去の 2011、2005、1998 の評価※について記載した。

⑥ 【全国カテゴリー】

環境省のレッドリスト 2020 のカテゴリー区分※ (令和 2 年 3 月公表) について記載した。

⑦ 【評価所見】

個体数、集団数、増減比、開発圧、採取・採食圧、地域固有性のうち特異的な内容を中心に記した。個体数の増減など、比較を必要とする場合は、レッドリスト 2011 を「前回」、レッドリスト 2024 を「今回」と略称する。前回の個体数は補正值に基づいている。

⑧ 【県内生育状況】

本県内の平均的な生育環境について記した。

⑨ 【特記事項】

上記共通項以外のものとして、当該種に係る主な標本・文献情報のほか、類似種との見分け方、その他の必要情報を記した。標本庫及び各コレクションの略称については以下のとおり、なお、標本庫の略称は Index Herbariorum code である。

SMNH	埼玉県立自然の博物館
TNS	国立科学博物館
MAK	東京都立大学理学部牧野標本館
TI	東京大学総合研究博物館植物部門および小石川植物園
KPM	神奈川県立生命の星・地球博物館
仮標本	埼玉県立自然の博物館未登録（1998 年版埼玉県植物誌証拠標本）
ト沢標本	埼玉県立自然の博物館未登録
岩田標本	国立科学博物館未登録
新岩田標本	（岩田豊太郎収蔵標本）
堀江標本	埼玉県立自然の博物館未登録
矢島標本	埼玉県立自然の博物館未登録

標本情報の表記方法は、「標本庫略称 登録番号（採集地 採集年）」とし、カテゴリー EX・EW・DD の種については採集地を知り得る範囲で記入した。その他のカテゴリーの種については保護の観点から採集地を省略した。未登録標本については各標本庫における登録番号が未定のため「コレクション名（採集者名 採集年）」とした。

文献情報の表記方法は、「著者名 発行年（生育地）」とした。

⑩ 【県内分布状況】

- ◎：今回の調査（2011-2022 年調査）において生育が多く確認された地帯
- ：今回の調査（2011-2022 年調査）において 1 地点以上生育が確認された地帯

⑪ 【分布図】

維管束植物のうち一部については県内分布図を掲載している。

分布図上の記号 区画とは三次メッシュを指す。和名横の数値は新旧生育確認区画数の計

▲：2010 年以前（2005-2010）のデータによる生育確認区画（■：新旧重複）

●：2011 年以降（2011-2022）のデータによる生育確認区画（■：新旧重複）

※過去の埼玉県レッドデータブックや環境省レッドリスト 2020 では絶滅危惧 I 類について I A 類（CR）I B 類（EN）と分割せず I 類（CR + EN）として評価しているケースがある。（埼玉再改訂版以降は CE と表記）それらについて本書では過去の冊子の表記等によらず全て CE の略称で表記している。